

湯川記念館設立をめぐる湯川から鳥養京大総長への書簡

1950年6月10日にコロンビア大学の湯川秀樹が京都大学第13代総長・鳥養利三郎(1887-1976)に宛てた手紙(d48-021)がある。手紙の内容は、小沼通二の論説「大学における研究所改革」(『講座 日本の大学改革 [4]』、1982年、299-324頁)を通して知られている。そこで湯川が列記した要望は、1952年7月に京大に設置される湯川記念館(翌年、基礎物理学研究所となる)の性格づけや運営形態などの方針を決定するうえできわめて重要であった。

(2) 湯川秀樹が下記に列挙する要望は、印字がぼやけておらず、読みやすいように修正した。以下に修正した内容を示す。

一、二百人以内の規模とする。

二、図書館、物理図書閲覧室の設備を完全にする。

三、約三十人程度の着席できる会議室。

四、随分くつろいで読める読書室(三十人程度)。

五、兼任教員用の研究室を各二、三ヶ所。

六、研究員大十数人(十五人を希望)。

以上各室へ全館工務を備えつづけること。

七、他の物理室、物理室等。

おもしろい建物、設備があれば、他大を参考に、行えぬものについては、湯川博士の希望を参考に、設備が

1950年6月10日に湯川が鳥養利三郎総長に宛てた手紙の一部 (d48-021)

湯川記念館設立への直接の契機は、1949年11月3日夜に湯川のノーベル賞受賞決定の一報を受けて鳥養総長が考えた記念事業にある。鳥養総長は、その後すぐに、京大物理学教室教授の荒勝文策(1890-1973)を呼び、記念事業の構想について相談し、それを受けて荒勝は同教室の小林稔(1908-2001)と話し合い、研究所設立の案をつくった。この前後のことは『基研案内』(1958年、1-12頁)で詳述され、荒勝・小林案の内容も次のように示されている。「理論物理学に重点をおいた5~7部門(部門というのは教室の講座に当る)をもつ研究所であって、素粒子論、物性理論、近代数学などの他に宇宙線、原子核の小規模な実験部門1~2を加え、さらに国際交流のため外国学者を招聘できるように、招聘外国人教授の席を2つ位おくという案であった」。「招聘外国人教授を思いついたのは、湯川博士らがプリンストンの研究所へ招聘されたことから考えて、わが国にも、このように外国学者を1~2年の期間で招くことが可能になれば研究所を国際的にできようという願望のあらわれであった」(『基研案内』、2頁)。

こうした先行する案があり、さらに日本学術会議第4部会(理学)からもサポートを受けて、1949年11月下旬には、京大に鳥養総長を委員長とする湯川記念館建設委員会が置かれ、実際の準備実行を行うための小委員会も設けられた(『基研案内』、3頁)。小委員会の委員長は当時の京大理学部長の長谷川万吉(1894-1970)、委員は理学部教授の小林稔と助教授の井上健(1921-2004)となり、小委員会は敷地、建物についての案を練った。最終的に、敷地については、理学部植物園の一角を利用することになり、建物については、京大建築学教室教授の森田慶一(1895-1983)に設計を依頼することになった。

しかし、敷地や建物設計の依頼先が決まっても、実際に研究所をどのような内容にするかについての議論は進んでいなかったようである。そうしたなか、在米の湯川から鳥養総長に宛てた手紙(1950年6月10日付)が届いた。当時、湯川はプリンストン高等研究所(以下、高等研究所)の1年間の滞在を経て、コロンビア大学の客員教授となっていた。この手紙は、鳥養総長の「電報による依頼にたいして、湯川記念館設計についての考え方と希望を書いたもの」である(小沼、304頁)。湯川の手紙に記された案には、高等研究所で便利と考えられた黒板が各研究室に備えられるなど、プリンストンでの経験が考慮され、また、全国の素粒子論研究者が全員入ることのできる200名規模の講演室など、素粒子論研究者の存在が強く意識されていた。彼の案は、日本の素粒子論研究者の利用を念頭に置きながら、高等研究所の長所を取り入れるものだった。

この湯川の手紙の内容は、1950年6月時点で同じく米国に滞在していた朝永振一郎も関係していた。1957年10月16日に湯川、朝永、小林稔、坂田昌一らが集い開催された座談会では(「座談会 基礎物理学研究所をめぐって II. 発展時代(基研として)」『自然』1958年2月号、22-34頁)、「原子核関係の研究者が一しょになってつくった基研とか核研とかの設立の精神がどうだったか」という坂田の問いに対して、当時プリンストンにいた朝永は、在米の湯川宅を訪れ、基研をどのような研究所にするかについて、二人で「プリンストンの高級研究所のようなものをつくったらどうか」と考えていたと語った。また、朝永は、「小林さんから青写真や何か送ってきたのを君(湯川)の家でみましたね」と述べている。このような湯川と朝永の話し合いを経て、湯川の手で書簡に託された研究所の内容は、鳥養総長の記念事業構想に具体的な肉づけを与え、本格的な始動を導いたのであった。

(小長谷大介)